

文字による理解VS音声を伴う理解

レパヴァー マリ

0. はじめに

日本では、主に読みすなわち文字を通しての英語学習が多い。その際、文字と音声を結びつけるための練習（音読）をあまり重要視せず、文字から直接概念と結びつくのが良いとする意見が少なくない。今回は、音声を伴わない文字のみによる理解が果たして可能かどうかを文字と音声と意味（概念）の関係を見て行くことにより考察する。

I. 音読に対する批判

Smith (1988) は、読む際には prediction (予測) をすることが大切であり、必ずしも音声が理解されなくても意味理解がなされると指摘している。これはちょうど、漢字を読めなくてもその意味を理解することができるのに似ている。彼はまた、英語とフランス語のバイリンガルを使った実験も行っている。これは、英語とフランス語が交じっている文をバイリンガルに読ませた後、どの語が何語であったかをたずねるものであった。結果的にはどの被験者も自分が理解した語が英語だったかフランス語だったか覚えていなかったため、Smith は、バイリンガルの読み手は単語を音声化する前に意味を理解している、と結論付けている。この実験結果から Smith のような結論が導き出されるか疑問であるが、少なくとも彼は、どういった方法でも読み手がテキストから「意味」を導き出せればよいのであって、そのためには必ずしも書かれた文字の読み方を知らなくても良いという考え方の方である。

垣田 (1993) もまた、学習者の熟達度が高い場合、読解は文字入力を直接意味理解に変えるスタイルをとるという説に賛成しているようである。いつまでも音読をしていたのでは読むスピードがつかないという説もこのことを前提にしている。しかし、全ての文字から直接意味へと結びつけるのは、母語においても特別な場合に限られると思われる。詳しくはⅣで述べることにする。

テキスト全体の意味理解を重視するのは最近の傾向であるが、これに関連した音読批判では、意味理解を伴わない音読は無意味であり (Rivers 1981) 意味理解のためには音読は邪魔になる、というものがある。意味理解を伴わない音読は当然、読解のためには役に立たないだろう。しかし、音読が理解を妨げるという場合、果たしてそうなのか、音読の定義を見直してみる必要があると思われる。このことについてもⅣで詳述する。

Ⅱ. 音読が有効であるとされる理由

ここでは、音読が読解に必要であるという説をいくつか挙げてみる。

まず最もポピュラーなものでは、音声と文字と意味の三者の結びつきが大切である (金谷 1995、大内 1994) というものである。特に日本人の場合、音声と意味の結びつきが文字のそれよりも弱い傾向にあるので尤もな指摘である。

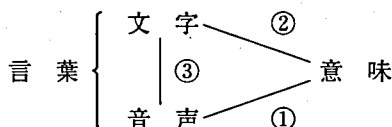
また、最終段階の黙読も、音読の練習を経て得られるスキルであるため、音読は大切であるという説がある。つまり、学習者の熟達度によって音読 → 黙読 → 目読と進んで行くわけである。果たして完全な「目読」などというものが可能かどうかについては後で検討する。

その他の音読の効果として、英語のリズムに慣れることによって読むスピードが速くなるとか、一字一句声を出すことでゆっくりとした正確な読みが可能になるとか、声を出して読ませることにより、学生の理解度が分かるとか、スピーキングやライティングなどの英語のスキルの向上に役立つ、などというものがある。

Ⅲ. 文字、音声、意味の関係

ⅠとⅡで音読をめぐる様々な意見を概観してきたが、ここで問題にすべきは理解を伴う音読が読解に効果的かどうかだけではなく、いかなる音声をも伴うことなしに文字を概念と結びつけることは可能なのか、ということであろう。もしこれが否定されれば、つまり読解の際、「何らかの」音声が必要であるということになれば、音読の重要性がさらに高まることになる。

そこでまず、文字と音声と意味の関係について考察してみる。三者のつながりは下の図のように表されるだろう。



①の音声と意味の結びつきについては、言語は音声言語がもとになっていることを考えれば自然なことである。第一言語習得の際もまず①の関係が形成される。

②は、読解において文字が直接意味と結びつく場合を表している。

③は、文字を音声化する場合である。

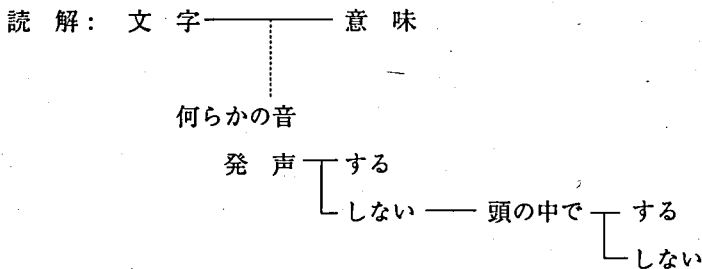
これを見ると、読解には2パターンあることが明確になる。一つは前述の、文字から直接意味理解をする②と、文字を一度音声化してから意味理解をする③ → ①という2つの経路である。次の章では、認知的実験結果や人間の記憶体系に関する記述をもとに、これらの2つの読解パタンのうち特に②の検証を行い、③ → ①をもとにした読解モデルの提示をする。

Ⅳ. ②と読解のモデル

先ず結論から言うと、②の、文字から直接意味へと移行する場合というのは

非常に限られていて、外国語学習の場合には考慮に入れる必要はないと思われる。ただし、the や like などのように、頻出し、しかも発音規則に従わない (like を規則通りに発音したとするとリケとなる) ような単語については、熟達度の比較的低い学習者でも音声を紹介することなしに意味へと移行することが実験により明らかになっている (Posner 1989)。しかし、全く何の音声も伴わずに文字言語を理解することは、熟達度の高い学習者にとってもほとんど不可能に近い。ラテン語を読む際ですら、何らかの音声を付加して読んでいることから分かるように、音声無しでは理解は困難である。

音声と文字の関係の重要性を語る前に、先ず、読解の過程を詳しく見て行くことにする。



上の図のように、読解は文字から意味を理解するわけだが、その際、文字が表す何らかの音を発声することを一般に「音読」と呼び、しないことを「黙読」と呼ぶ。これまでの音読に関する議論は、この段階で終わっているが、本稿ではさらにその先まで考察を進めてみることにする。

読み手は、たとえ周りに聞こえるように発声されなくとも、その文字を「自分なりの音」に音声化したものを認知プロセスの中で使用して意味概念と結びつけているのではないかと考えられる。この学習者の使用する「自分なりの音」についてはこれまで議論の対象になっていないし、指導者に聞こえないだけにチェックも指導もされてきていない。そのため、ともすれば学習者は間違った発音やリズムを継続して使用しがちである。そこで、この段階まで音読とみな

し、指導の対象に入れていけば良いのではないかと思う。

そして全く音声化をしていないのが②の「真の黙読」といえようが、これは理論的に不可能であるという説が多い。

例えば Posner (1989) は、単語から意味へアクセスする際、次の2つのルートがあると紹介している。

1. 単語 → 心的辞書 → 意味：(直接的ルート)

2. 単語 → 音声符号 → 心的辞書 → 意味：(間接的ルート)

彼は、これら2つのルートを検討するために、単語のカテゴリー分けの実験を行なっている。これは、様々な単語を母語使用の被験者に見せて、どのカテゴリーに属するかを決めさせるという実験である。例えば、meat は food のカテゴリーに入るが、rock は入らない。ここで、meet のような、スペルが1字だけ meat と異なる同音異義語と、melt のようにやはりスペルが1字だけ異なるが音も全く異なる単語の認識のされ方を比較した。その結果、同音の単語を meat としてカテゴリー分けした被験者は25%いた一方で、音が異なるほうは10%以下だった。以上のことから、音声依存処理は、母語使用においてさえも、活字単語が意味にアクセスするための正常な過程であることが経験的に証明された。

また、田島 (1995) も、記憶されている言葉は音声の聴覚像と概念・意味の結びつきから構成されており、いかなる文字言語も記憶体系としての音声言語が前提となっていると述べている。

V. 指導者への提案

以上、読解における文字と音声の結びつきの重要性について述べてきた。理解のためには必ず何らかの音声符号的なものが必要であり、それは学習者の熟達度によりばらつきがある。そこで、結局音声が必要なら、始めの段階から正しいリズムと発音を音読その他の発音指導によって身に付けることにより、最

終的には読解やその他のスキルの向上にも効果が現れるものと考えられる。

今後の課題としては、日本語にせよ英語にせよ、それぞれの個別言語の音韻体系はバランスがとれているものなのか、その体系を習得することは他のスキルの向上に直接関連があるのかどうかについてさらに研究を進めたい。

参考文献

- Krashen, S. Language Acquisition and Language Education.
Prentice Hall International English Language Teaching, London. (1989)
- Posner, M. I. Foundations of Cognitive Science.
The MIT Press, Massachusetts. (1989)
- Rivers, W. M. Teaching Foreign-Language Skills, 2nd ed.
The University of Chicago Press, Chicago. (1981)
- Smith, F. Understanding Reading, 4th ed.
Holt Rinehart and Winston, New York. (1988)
- 卯城裕司 「音読における認知スタイルの分類と評価」
【STEP BULLETIN vol.7】STEP. (1995)
- 大内由香里 「話し・読むこと」学習活動との関連 -音読-」
【英語教育vol.43】大修館書店 (1994)
- 垣田直巳 【英語のリーディング】大修館書店 (1984)
- 金谷憲編著 【英語のリーディング論】河源社 (1995)
- 田島 稔 「ことばの理解と記憶についての覚書」
【外国文学第4 4号】(1995)
- 田島 稔 「音声言語と文字言語」【外国文学第4 1号】(1993)
- 田島 稔 「音声言語と文字言語Ⅱ」【外国文学第4 3号】(1994)